九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

小津久足「みたけのしをり」について : 付翻刻　小津久足「みたけのしをり」・本郷有郷「三多気の日記」

菱岡, 憲司
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/15079

出版情報：文獻探究. 46, pp.1-21, 2008-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

小津久足「みたけのしをり」について

――付翻刻　小津久足「みたけのしをり」・本居有郷「三多気の日記」――

菱岡憲司

「みたけのしをり」について

小津久足「みたけのしをり」（「御嶽の枝折」「御嶽日記」とも）は、文政十三年（一八三〇）閏三月一日より一泊二日の旅程で、桜の名所として名高い伊勢国一志郡石名原駅に近い御嶽（密嶽・三多気とも、現三重県津市美杉町三多気）を旅した折の紀行である。

一行は、小津久足・本居有郷・久世安庭・野口茂安・坂田茂直の五人で、供の男二人をしたがえる。

小津久足は、通称新蔵・与右衛門、号桂窓。文化元年（一八〇四）生、安政五年（一八五八）没、享年五十五歳。江戸店持ちの豪商「湯浅屋」六代目。戯作者曲亭馬琴の友人、また古今の稀書を蒐集した西荘文庫の主として知られる。詳しくは高倉一紀「小津久足」[1]、および拙論「小津久足『陸奥日記』について」[2]を参照されたい。

本居有郷は、通称源之助。文化元年（一八〇四）生、嘉永五年（一八五二）没、享年四十九歳。本居春庭の長男であり、文政十一年（一八二八）に春庭が没すると、家督を相続した。その際、小津久足が後見人となっており、両者の関係は深い。

久世安庭は、通称弥一郎、文化四年（一八〇七）生、明治二十年（一八八七）没、享年八十二歳。『松阪市史』所収「久世家文書」の解説[3]に次のようにある。

> 国学方面では、宣長の孫の本居有郷没後、四日市の高尾家から宣長の外曽孫に当る玖之助を第四代の松坂本居家の当主（信郷、のち健亭）として迎えるにあたり蔭の力となって奔走。万延元年には松坂国学所開設の世話人となり、「諸生引立方」に任ぜられている。また前記本居健亭の長女あきを長男・安重の嫁に迎え、本居家とは親類の仲になっている。鈴廼屋社中の幹事もつとめ、歌道では百人を越える門弟を擁した。[4]

有郷没後の松坂で重きをなした人物であるとわかる。

野口茂安・坂田茂直について詳細は不明だが、春庭の門人録[5]に、小津久足・久世安庭とともに名を連ねる。以下、当該箇所をそれぞれ抜き出して示す。

（〇文化十四年丑）

同　同（伊勢國松坂、菱岡注）　小津安吉　久足

（〇文政八年酉）

同（伊勢國、菱岡注）松坂　野口彦三郎　茂安

伊勢國松坂　久世彌一郎　安庭　初準助庭民

（〇文政十三年寅　死後入門）

伊勢國松坂　坂田惣兵衛　茂直

野口茂安は久世安庭と同年に入門。坂田茂直は、「みたけのしをり」の旅をした文政十三年、春庭に死後入門している。文政十三年は十二月十日に天保へと改元する。よって入門の日時はさほど絞り込めないが、春庭の後継者有郷、有郷の後見人久足との旅行に「したしき友どち」として同道していることと、春庭への死後入門とは無関係ではないだろう。

「みたけのしをり」本文には、「われはかごのかたにのらんとするを、外の若人は」との記述があり、同年生れの小津久足と本居有郷を年長とし、両者より三歳年少の久世安庭、安庭と同年入門の野口茂安、そして坂田茂直の順で歳が若くなるかと推される。

なお、この五人の名は『伊勢人物志』（天保五年刊、松坂・深野屋利助）の「松坂部」[6]にも記載がある。当該箇所をそれぞれ抜き出す。

茂直　〔笙〕　坂田常吉

久足　〔和歌／平家〕　〔百足町〕　小津新蔵

有郷　〔和歌／古学〕　〔魚町〕　本居健蔵

安庭　〔仝（和歌、菱岡注）〕　久世準介

茂安　〔和歌〕　野口彦三郎

本書の紳士録的性格[7]から、これをもって野口茂安・坂田茂直の二人を著名人の列に連ねるわけにはいかないが、少なくとも風流文事に関心のある人物であったとは言えよう。

久足は商用のため京・江戸に赴くこともすくなくない。また文政十三年までに「吉野の山裏」（文政五年、一冊）「江門日記」（文政七年、一冊）「石走日記」（文政七年、一冊）「柳桜日記」（文政十一年、三巻三冊）「月波日記」（文政十二年、二巻二冊）の五点の紀行文を著している。旅慣れた久足が旅行を主導していることは、日程を一泊二日と定める経緯を記した冒頭の記述からもうかがえる。

「みたけのしをり」の書誌

「みたけのしをり」は、天理大学、日本大学、慶応大学に所蔵される。天理大学所蔵の久足紀行文は、現在未整理のため閲覧を許可されない。よって、日本大学・慶應義塾大学所蔵本の書誌を記す。

日本大学総合学術情報センター蔵（081.8/0.99/9）。一冊。24.6 × 17.2糎。仮綴。共表紙。外題「御嶽の枝折　記行九」と表紙左に打付書。内題「御嶽日記」。十行書。三十丁。印記「日本大学図書館蔵」。胡粉による訂正あり。付箋あり（八丁ウ）。奥書「小津久足」。

慶應義塾大学附属図書館（旧館）蔵（240/233/1）。一冊。23.3 × 16.4糎。表紙は茶の横刷毛目模様に銀で鳥の意匠。外題「みたけのしをり　全」と左肩に単枠題簽。内題「御嶽日記」。十行書。三十丁。印記「慶應義塾図書館蔵」。胡粉による訂正あり。付箋あり（二十九丁ウ）。奥書「小津久足」。

慶應義塾大学が所蔵する小津久足の紀行文は、「みたけのしをり」「陸奥日記」「難波日記」の三点であり、写本の性格は同じであると考えられる。すなわち拙論「小津久足『陸奥日記』について」[8]で考察したように、日大本と天理本は自筆稿本であり、慶大本は筆工に書写させたものであろう。また、慶大本の付箋も日大本と同じく久足の筆跡であるため、慶大本も久足の管理下にあったと考えられる。

今回、翻刻の底本には慶大本を用いた。

本居有郷「三多気の日記」について

じつは「みたけのしをり」以外にも、文政十三年閏三月一・二日の御嶽への旅を記した紀行文が存在する。それは、旅に同道した本居有郷の「三多気の日記」（「密嶽日記」）と、久世安庭の「みたけ日記」（未見）[9]である。すなわち同じ行程を旅した三つの異なる紀行文が残っていることになる。

旅に先立ち、久足らが当然閲読したであろう紀行として本居宣長『菅笠日記』が挙げられるが、この明和九年（一七七二）の吉野への旅に随行した稲懸茂穂（本居大平）も『餌袋日記』を残している。[10]また天保十二年（一八四一）、筑前国遠賀郡より伊勢・善光寺・日光への約五ヶ月の旅をした小田宅子（いえ）と桑原久子が、それぞれ「東路日記」「二荒詣日記」を著わし、師の国学者伊藤常足に添削を乞うている例[11]もあり、同じ国学門徒の営為として注目される。

このような類例があるものの、今回のように同一行程を三者が書き残しているケースはやはり珍しい。また、久足は「おのれひがものなればにや、いまだ年わかけれど、世のさわがしきをこのまず、はた人とまじはることをもこのまず、たゞ山水をよろこぶと古をこのむとのくせあり。さればともなふ人もなく、たゞひとり旅におもむくことをりく〳〵なるがごとし」（「梅桜日記」天保四年）と述べるように、その後は供の男だけを連れた単独行が多くなる。そうした意味でも、これらの紀行は異なった視点を比較検討し、それぞれの個性をうかがうことのできる貴重な資料であるといえる。なお、久世安庭「みたけ日記」の調査は本稿に間に合わせることができなかった。よって今回は本居宣長記念館の所蔵する本居有郷「三多気の日記」について紹介したい。

本居宣長記念館は、二点の「三多気の日記」（「密嶽日記」）を所蔵しており、それぞれ稿本と浄書本にあたる。まず書誌を記す。

稿本。本居宣長記念館蔵（典34）。一冊。25.6 × 17.2 糎。仮綴。共表紙。外題「密嶽日記　有郷著」と表紙左に打付書。表紙「有郷著」右に「稿本　大平翁添削カ」と付箋。内題「密嶽日記」。十行書。十丁。印記「須受能／屋蔵書」（朱陽 3.7 × 1.9 糎）。付箋百九枚。奥書「本居有郷」。

浄書本。本居宣長記念館蔵（典35）。一冊。25.5 × 17.2 糎。仮綴。共表紙。外題「三多気の日記」と表紙左に打付書。表紙外題下に「修正本」と付箋。内題「密嶽日記」。十行書。十丁。印記「須受能／屋蔵書」（朱陽 3.7 × 1.9 糎）。奥書「本居有郷」。

両本ともに、昭和五十四年度に本居家から本居宣長記念館に寄贈されたものである。稿本表紙に「稿本　大平翁添削カ」との付箋がある

が、筆跡などからは大平である確証を得ない。その稿本に付された百九枚にものぼる付箋は、語句の言いまわし等の修正がほとんどである。先の小田宅子と桑原久子が、師の伊藤常足に添削を乞うたように、久足・有郷・安庭が大平に紀行の添削を乞うたのであれば、春庭亡き後の松坂本居門の動向を知るうえでたいへん意義深いが、すくなくとも久足の紀行文には、大平に添削を乞うた形跡は見つからない。存疑のままにしておく。

同じ一泊二日の旅程でありながら、有郷「三多気の日記」十丁に対して、久足「みたけのしをり」は三十丁と三倍の分量となっている。比較すると有郷の記述は淡泊に思えるが、久足の記しぶりが詳細をきわめるととらえた方がよいだろう。

差し引き二十丁分の余剰に久足が記すのは、詳しい地名と道程、古跡の由来およびそれに対する考察、より多くの短歌と長歌、同道の人々や村人たちとの会話、そしてときに辛辣にさえなる率直な心情の吐露である。いずれも久足紀行文の特徴であり、魅力でもある。

旅程と諸特徴

ここで「みたけのしをり」にもとづきつつ、適宜、有郷「三多気の日記」を参照して、旅の概要と両者の紀行文の諸特徴を記す。

文政十三年三月、年来の願いである御嶽の花見に出発するべく旅の支度をする。御嶽への往還は山道なので二泊するのがよいとの助言にも、久足は「おのれ足よわからねば、一夜やどりて二日のうちにかへらんこと、なでうことかあらん」と主張して、一泊二日となる。三十日に出発するはずであったが、あいにくの雨で一日延期する。

閏三月一日、天気も回復し、未明に家を出る。五曲村・井村・深長村・伊勢寺村を通り、堀坂峠の麓にいたる。登りは「つゞじ・すみれ・山吹」が目を喜ばせ、堀坂神社の考証をしつつ峠を越える。峠を越えると一志郡であるが、「かく郡のたがへるのみならず、時候さへかはりて、すぎこしかたよりこよなくさむき」と、気候の変化に日常空間からの越境を意識する。

与原・後山村を経て柚原村にいたり、ここで準備した弁当を食べる。柚原村を出て、途中蘭（あらゝぎ）神社に詣で、小川村にいたる。もっとも有郷は、小川村着後に蘭神社に詣でたとしており、両者の記述は食い違う。道順からすれば久足が正しいか。

小川村の「何がしといふ寺」（万福寺）から右折してしばらく行くと立派な一本の桜を見つける。ここで里人に道を問うと、寺を左折しなければならなかったことを知り、来た道を引き返す。『この道をたがへずは、かの一木のさくらは見まじきを、なか〳〵幸なり』といふ人」とは、有郷であることが「三多気の日記」から知れ、それに対して久足は「まけじだましひよとをかし」と述べたうえで、旅行の際、人に道を聞く大切さを説く。

下多気村に入り、上多気村の北畠神社を詣でる。「おのが遠つ祖もこの君につかへ奉りし」（久足）「おのが遠祖のつかへまつりし北畠の君」（有郷）と、二人の北畠具教への思慕の念は深い。[12] その城跡のある霧が峰を仰ぎ、御庭を散策する。有郷は「いろ〳〵ふるき石などあり。この石にいろ〳〵の名ありときけど、しられず」と細かい穿鑿はしないが、久足は「汀にたて石いとおほく、蛙石・琴石などいふ名ある石もありて、すべての石のさまも、よの常ならず」と固有名詞を記しており、両者の記述態度の違いがよくあらわれている。

伊勢本街道に合流し、「このころ阿波国・紀伊の国などに御影参てふことはじまりたるとて、その国人どもの菅笠と杓とをいづれもたづさへて、かずかぎりもなくゆきかよふは、ことにゝぎはゝし」と、御陰参りで混雑する様子を伝える。

ここで食事をとったのち、古来難所として名高い飼坂峠にいたる。久足は天保十一年の「陸奥日記」に「われ馬にのりしことはいまだなし。こは乗馬は身におはぬことゝこゝろみず、旅にてはあやふきをゝそれてのことなり」と記すように、その年まで危険を避けて馬には乗らない。当然この旅でも馬を避けて駕籠に乗るが、「外の若人は、『馬もめづらし。かゝるをりならでは』などいひつゝ、俗にいふ『三方かうし』といふにあつらへて、かの坂路にかゝる」と、同行の若者は三方荒神（馬の背と左右に人・荷物を載せる枠を設けた鞍）をつけた馬に乗る。

馬のうへにのりたる人たちは、よそめもあやふく見えたるを、わか人たちはさもおもはぬにやあらん、馬の口とるをのこにそゝのかされて、もろごゑに「やあとこせ。よいやな」とかやいふ、をりにふれたる歌を、いと声だかにうたひつゝ、さゞめきのぼるを見るも、かつは興あり。

との描写は、「むつまじき人々」との愉快な旅の様子をよく伝える。

飼坂峠・桜峠を越え、奥津駅を経て石名原駅にいたる。御嶽もちかいため、ここで馬・駕籠を降りる。

御嶽に向かう午田山にのぼり、御嶽をながめると「ふもとより峰までたゞ一すぢに、数かぎりもなきさくらの今をさかりと咲ならびたるが、ひとめに見わたされたる」と噂どおりの眺望に感嘆する。

はやる心のままに御嶽をのぼると、花のなかを進むがごとき桜の多さに感じ入る。

いとも〳〵大きなるみきは三かゝへ四かゝへもありぬべく、高さは五六丈ばかりもあるべく見ゆる。世には見なれぬ大きなる花の木どもおほくありて、げにたぐひなき花の所也。凡十町あまりがほどはおなじさまなる並木なれば、おほしとも、かぎりなしとも、めざましとも、めでたしともいはむはなか〳〵おろかにて、皆人もわれも、たゞめをおどろかしたるばかりにて、いかゞとも言葉にはいひがたく、こゝろはゐひたるがごとし。

やがて蔵王権現にいたる。その傍らの真福院について「この寺の庭、うちはれたる所なれど、まへなる木立にさへられて、桜はおもふばかりも見えず」と述べるが、有郷の紀行により、眺めがよければこの寺に宿りを乞う計画だったことが知れる。

もとの道を引き返して坂をくだる際、桜の数を数えることにする。有郷は「七百本ばかりもありて、大木は五十本計もあり」と記すが、久足は「よの常の大きさばかりなる木ども六百七八十本あまりもありて、その中によにまれなる三かゝへ四かゝへもあるべき大木五十本あまりあり」と記す。六百七八十本もの桜を数えるところに、一行の浮かれぶりがよくあらわれている。また、ここでも「七百本ばかり」と概数を記す有郷に対して、久足の詳細な記述ぶりが見てとれる。

ここで久足は、御嶽の桜は吉野に比べると数が少なく、嵐山に比べると景色が劣ると比較したうえで、「この五十本あまりの大木は、よしの・あらし山にもたぐひなければ、こればかりぞ、この山のよしの・嵐山にもまさりたる所なる」と冷静な批評を加える。こうした経験に裏打ちされた冷静な視点は、いかにも商人的合理性を尊ぶ久足らしい。

さらに久足は、三十首の短歌と二首の長歌を記す。一首のみの有郷とここでも対照をなす。

石名原にもどり、「中子なにがし」の宿所に泊ろうとするものの、折からの御陰参りのせいでまったく空きがない。方々の宿所をたずねたあげく、村役人の力を借りて最初の「中子なにがし」のもとにやっと泊ることができたものの、供の男を入れた七人が狭い一間に寝ることになる。

宿の主に話を聞くと、花見にくる人はさほど多くなく、地元の人は見慣れて珍しいとも思わないため、桜のしたで円居する人も少ないという。これを聞き久足は次のように述懐する。

まことや、かゝるめでたき花を、かく見る人のすくなきは、あかずくちをしきやうなれど、見るためにはうるさきことなく、心しづかにしていとたよりよく、かつは花をかごとに、その花はよそにして、酒のみ、ものくふことをむねとしつゝ、たはぶれくるふおこ人のなきは、中々に花のためにはきよらかにてよかるべくや。さればわがごとき、よにねぢけたるひがものゝためには、よにたぐひなきところなりけりと、かへすがへすもめでたくおぼゆるは、このみたけの花なりかし。されば、みやびやかにまことの花見をせまほしくおもふ人あらば、かならずおもひたつべき所にこそ。

閏三月二日、また午田山に赴き、朝日に照らされた御嶽の姿をながめる。続いて御嶽にのぼり、あらためて絶景を堪能したのち帰途につく。

石名原にもどり、ここからは往路と別の道をゆく。老鹿村・八知村・竹原村・南家城を経て北家城にいたる。瀬戸ヶ淵の岩村のさまに久足・有郷ともに感じ入る。千方岩に対して有郷は「里人のいろ〳〵いひつたへもきゝつれど、わすれたり」とそっけないが、久足は故事を引いて考察を加える。

川口の関跡を遠くに見て川口駅に入り、久世安庭のゆかりの家で食事をすると、雨が降りはじめる。

柚生村を過ぎると雨がはげしくなる。初瀬街道に合流すると、ここでも御陰参りの人々が目につく。大仰駅で蕎麦切を食べ、ここから駕籠に乗る。谷戸・井関・八田駅をすぎると風雨がさらにはげしくなり、あとはどこを通ったかも分からぬまま、亥の刻過ぎにようやく帰宅する。

最後に「色香なき言葉の花もみたけ山わけ見む人の枝折とはなれ」と詠む。これが「みたけのしをり」と題する所以である。

以上の概要によっても、饒舌な久足紀行文の魅力が感じられるかと思う。また有郷の要を得た記しざまも旅の趣をよく伝える。翻刻で両者の違いとそれぞれの魅力を確認してほしい。

松坂本居家

最後に、この旅に同道した面々からうかがえる松坂本居家の様相について述べる。

松坂在住の殿村安守（篠斎）と小津久足は、曲亭馬琴と作品の評答を交わす間柄で、書物の貸借を頻繁に行っていたことはよく知られる。足立巻一氏は、「安守の影響は殿村常久や小津久足におよび、松阪に独自の気風をつくった」として、平田篤胤が松坂を訪れた折、安守らが応対したことを挙げて、彼らの「排他的でも迎合的でもなく、いいものをいいとする批評を持」つ気風を高く評価する。(13)

今回の紀行では、小津久足・本居有郷・久世安庭の近しさが浮き彫りになった。本紀行の翌天保二年の小津久足「花染日記」には、

このところまで久世安庭・笠固清雄・関屋景之など、おくりきつ。この三人もおなじく花見にゆくべく、かねてはちぎりおきしかど、さはることありて、えゆかぬを、いと口をしきよしいへり。よりて、ともなふ人々は久世安庭の弟の久庭と坂田茂稲なり。

と、久世家との緊密な関係が見てとれる。

すなわち、いささか図式的に述べるならば、春庭を後見した殿村安守、春庭の息有郷を後見した小津久足、有郷の養子信郷を支えた久世安庭と、松坂本居家を下支えした安守・久足・安庭が、ある種の共同体を形成していることが見てとれる。もちろん、たとえば久足が「海山日記」（嘉永六年）で「昔の友なりし殿村安守は歌をよめりし人なりしが、見識いとせばく、田舎人のくせをのがれず」と述懐するように、共同体内部の人間関係を正しく見きわめる必要があるが、従来ほとんど顧みられなかった久足と安庭の関係を知り、春庭没後の松坂の様相を見定めるうえでも、今回の紀行群は貴重な情報を与える。

注

（1）『松阪学ことはじめ』おうふう、平成14・5。
（2）「語文研究」98号、九州大学国語国文学会、平成16・12。
（3）『松阪市史　第十一巻　史料篇　近世（1）　政治』昭和57・9。
（4）適宜注を省略した。
（5）『本居全集　首巻』本居清造編、吉川弘文館、昭和3・3。
（6）『近世人名録集成　第二巻』森銑三・中島理壽編、勉誠社、昭和51・3。
（7）本居宣長記念館・吉田悦之氏御教示。
（8）（2）に同じ。
（9）（7）に同じ。
（10）尾崎知光・木下泰典編『菅笠日記』和泉書院、昭和62・6。
（11）前田淑「伊藤常足門下の女流とその作品――紀行文学を中心に――」「福岡女学院短期大学紀要」1号、昭和40・3。『中間市史　中巻』平成4・3。井上敏幸他「福岡女子大学附属図書館蔵『東路日記』翻刻・解題（上）（下）」「香椎潟」40・41号、平成7・3同8・3。田辺聖子『姥ざかり花の旅笠――小田宅子の「東路日記」』集英社文庫、平成16・1。前田淑「吉野の花見と伊勢参り――小田宅子『東路日記』」「国文学　解釈と鑑賞」平成18・8。
（12）それぞれの祖先と北畠家との関係については、本居宣長「家のむかし物語」（『本居宣長全集　第二十巻』筑摩書房、平成2・12）、小津久足「家の昔かたり」（小泉祐次「小津久足自筆本『小津氏系図』と『家の昔かたり』について（二）」「鈴屋学会報」5号、昭和63・7）に記載がある。
（13）足立巻一『新装版　やちまた　上巻』河出書房新社、平成2・11。

凡例

一、小津久足「みたけのしをり」は慶應義塾大学蔵本、本居有郷「三多気の日記」は本居宣長記念館蔵浄書本を底本とした。
一、適宜、句読点・濁点・括弧・改行・字下げを加えた。
一、漢字は通行の字体を用いたが、固有名詞は原文の表記にしたがった。
一、「ゝ」「〳〵」は残したが、漢字の後の「〻」「〳〵」等は「々」に統一した。

小津久足「みたけのしをり」

御嶽日記

伊勢の国一志郡石名原といふ駅ちかきあたりに御嶽といふ処ありけり。その山を俗に元芳野といひて、さくらのおほきこと吉野にもをさ〳〵おとらぬよしいへば、いとゆかしくて、わがすむかたよりさばかりとほくもあらぬ所なれば、はやくよりゆきて見まほしくて、山分衣おもひたゝぬにはあらねど、「花見てくらす春ぞすくなき」とむかしの人のいひけむごとく、いたづらにすぐしきぬるはいとくちをしくなむ。さるはなほざりなる心ならねど、花のをりはあやにくなるものにて、日数のあひだもしばしのほどなれば、よのことにかゝづらひてさはりがちなる身にはおもふにまかせずして、五年六年のほどもあらましのみにすぎゝぬるを、さのみやはと、しひておもひたちて、ことし、したしき友どちといひかはしつゝいでたらむとす。「道のほどは十里あまりなれど、すべて山道なれば、二夜やどりて三日のうちにゆくかたよからん」といふ人もあれど、おのれ足よわからねば、一夜やどりて二日のうちにかへらんこと、なでうことかあらんとて、その心がまへを友どちにもいひあはせつゝ、いともかりそめなる旅にはあれど、あすたゝんとての日は、雨ぎぬ・菅笠などの心がまへすとて、さすがにいとなきこゝちす。かくいふころは文政十三年といふとしの三月廿日あまり九日なり。ことしは閏三月ある年にて例よりは花もおそかりしかど、このあたりの花はおほかたちりつくして、中にもおそきかぎりの花ばかりぞ、いさゝかのこりたるころほひなる。もとより蜜嶽のあたりはいとさむきところにして、このあたりの花はちりての後のころさかりなるよし、かねてきゝおきたれば、おほかたこのころやさかりならんとて、かくはものするなり。さてあすの道はさきにいへるごとく、山道のことにしあれば、よふかく旅だつかたよからんとおもへば、常よりもこよひはとくいねたるに、夜中すぐるころほひより雨ふりいでゝ、あやにくに風さへあらく吹いでたるは、いと心つきなし。かくては、しひてもゆかるまじければ、明日は先おもひとゞまりて閏三月の朔日にゆかんとはおもへど、とにかくに雨風のおと耳にかゝりてしばしもねられず、とかくするほどによもあけぬ。けふはすなはち三十日なり。雨は猶やまず、ます〳〵ふりそひてやむべくも見えねば、かくては、かの山の花やいかならんとて、やすき心もなくおぼゆるまゝにおもひつゞけたる。

おもひあへぬけふの雨風こゝろあらばみたけの花をみださずもがな

うしつらしおもひし花のそれならでたちかはりたる空の雨雲

おもひやる心ぞなやむ雨風にみたけのさくら見にはゆかねど

かくてひるつかたより雨はやみたれど、猶雲のふかきは心にかゝりたるに、未の刻すぐるほど、にはかに西風はげしく吹いでて、青き雲のところどころ見えそめたるは、うれしともうれし。

花のためうきはおもはで雲はらふかたにうれしきけふの春風

心してみたけの花の雲まではふきなはらひそけふの春かぜ

雲はらふあらしも花にいかならんあふさきるさのけふの空かな

閏三月朔日。いとよふかくおきいでたるに、星のひかりもいさゝかくもらはしげなく、きら〳〵と見えたるは、天気もよかんなりとて、まづこゝろやすし。朝げしたゝむるほど、かねていひあはせし友どちもいで来たり。そのひと〴〵は、本居の有郷、久世の安庭、野口の茂安、坂田の茂直なり。かくてその人たちをいざなひていでたつに、も

とよりむつまじき人々なれば、何くれのものがたりなどしつゝさゞめきゆくも、いとこゝろゆく道なりけり。先、坂内川のつゝみのうへをのぼりゆくほど、朝風いとさむし。かくて五曲村をすぎて、石地蔵のある道のちまたより右のかたにをれて、井村にいたる。この村の石ばしをわたりて、樋口曲などいふ村をすぎたる道の左のかたに、木魂森といふ森あり。この森のほとりをすぐるほど、なにゝまれ声をたてゝよべば、やがてその森の中にてそのごとくこたふるによりて、かくいふなりときけば、たはぶれによばゝりみるに、人のいへるにたがふことなし。山彦とて、山にはかゝるたぐひ、よの常なるを、村の中にはめづらしくこそ。深長村といふをすぎて、道の右のかたに金塚といふ塚あり。いとふるく見ゆる石の五輪ありて、芝生をたかくつみたてたるうへに松の木のまばらなるも、あながちちかきよの墓とは見えず。「何人のはかにや」といへば、「五輪の台に何がしとかやいふ名をゑりつけたり」と久世安庭いへり。又野口茂安は「何がしてふ鷹追の墓なりといふ説あり」といへり。この墓をすぐれば伊勢寺村にて、村中に伊勢の国の国分寺あり。今は真言宗にてちひさくなりたれど、むかしの国分寺の跡なることはいちじるく、今もをりにふれては古き瓦をほりいだすことありとなん。されば伊勢寺てふ名もこの寺のあるよりいへる名にはあらじか。この村をはなるゝ所より川にそひて横瀧山のふもとをゆくほど、よもやう〳〵あけにけり。

空もやゝしらみそめたる横雲に横瀧山のふもとをぞゆく

このあたりまで松坂より一里半あまりもあるべし。こゝはやがて堀坂山のふもとにて、道のほとりに石ノ地蔵ありて「一町」とゑりつけたるは、ちかきよにたてたるにて、この堀坂山の峰まで四十町のうち、一町ごとにたてたる道しるべなり。かゝるたぐひよにおほきものながら、こしかたゆくさきのほど、はかりしられてたよりよきもの也。やゝゆけば、道より半町ばかり右のかたに大きなる石の鳥居ありて、木立いとものふかく神さびたる宮居おはします。鳥居のかたはらに碑もあれば、立よりて見るに、正面には「禁殺生」とありて、かたわきには「堀坂神社」とゑりつけたり。さればこそ、かう〳〵しく見えたるもうべなりけれ。「延喜の式」にも見えたる御社なるものをとおもはれぬ。さてこの碑は享保といふとしのころ、我殿のいたりふかき御心より、「式」に見えたる神社の領内にましますかぎりは、こと〴〵くこの石をたてられたるにて、外の御社にもたてられたること、もとより人のしる所なり。いともたふときことになん。この御社はこの鳥居より三四町もおくのかたにおはしますとぞ。こゝより一二町ゆきて土橋をわたるに、川の流もいさぎよく、山の木立もやう〳〵よはなれたるけしきになりゆくもめづらしくおかし。又二三町もゆきたる所の川のむかひに山祇御社おはします。拝殿はこなたのきしにありて、その拝殿のほとりなる松の木の間に一木さくらの咲たるが、今をさかりにて、いとおもしろく見えたり。

山祇のみまへと花もこゝろしてかゝるさかりや見するしらゆふ

この川にそひて坂路をのぼるほど、をりにふれたるつゝじ・すみれ・山吹などの、こゝかしこに咲たるも、あかずめとまるさまなり。わらびのもえいでたるを、

あすならばかへるたもとやおもらまし道のゆくてにもゆるさわらび

この坂路はさばかりけはしからねば、さのみくるしくもおぼえず。ほどなく四十町をのぼりつくして峠にいたる。この所よりわがすむあたりはいふもさらなり、海のかたまでいとまぢかく見えてけしきよし。

この峠に石の鳥居ありて「当国第一山」といふ額をかけたるは、大宮と申て堀坂大権現とまうす神の鳥居なり。御社はこのところより十八丁のぼりたる所にありて、すなはちこの山の峰のうへにおはするなり。「式」に見えたる御社は、かのふもとなる御社にはあらで、この峰なるにはあらじかともおもへど、すべて「式」に見えたる御社の山の名をおひ給へるたぐひ、峰におはするも、ふもとにおはするも、今のよにたぐひおほきことなれば、峰なるか、ふもとなるか、まことはさだめがたかるべけれど、碑をふもとのかたにたてられたるは、そのをりふるきつたへなどのありてならんかともおもはるれば、しばらくふもとなる御社のかたを、「式」に見えたる御社なりとさだめおくべきか。

この峠をくだれば、やがて茶屋ありてしばしやすむ。飯高郡はこの峠をさかひにて、こゝは則一志郡なり。かく郡のたがへるのみならず、時候（トキ）さへかはりて、すぎこしかたよりこよなくさむきは、北おもてなるけにやあらん。さればさくらもこゝかしこにさかりにて、桃の花なども猶さかりに見えたり。「かく峠をさかひにて寒暖のたがへるをおもへば、かのみたけの花もよきころなるべくや」とゆく〳〵いひかはしていとたのし。道にてきゞすの鳴ければ、

妹がめをほり坂山にたへかねて鳴かきゞすの声きこゆなり

布引山の横にまぢかく見えたるも、常々見なれたるには方角たがひてめづらしく見ゆ。

堀坂のみねうちこえてながむれば横ほりふせる布引の山

かの茶屋より四五町きたる所に道のちまたありて、右のかたは与原といふ山さとに入て、飯福田寺といふにまうづる道なり。この飯福田寺といふは、みたけになずらへて人のまうづる所なれど、道いそがれば、えたちよらず。左のかたの道に入ておなじやうなる坂路をのぼりくだりて、後山村といふをすぎ、柚原村といふ山里にいたりてさゝごひらく。この道は旅人のかよはぬ道にて、ものくふことなどかたしときゝしかば、かくはさゝごをものせし也。この柚原までまつ坂より三里半なれど、山道なりしかば、ほどゝほくおぼえたり。この村をすぎてすこしゆけば、道のかたはらに蘭大明神と申神の鳥居たてり。こはいかなる神のましますにか、としごとの八月朔日にはまうづる人いとおほくて、わがすむあたりよりも、そのをりにはまうづる人あり。すべてこの宮にまうづる人は、守なりとて杉の葉をとりきたるがならはしなり。

稲荷山それにはあらぬあらゝぎの社にもなほかざす杉の葉

猶おなじやうなる坂路をのぼりくだりて、柚原より一里といふに、小川といふ山里にいたる。すべて堀坂の峠よりこなたは花ざかりにて、ところ〴〵に見えたるはまばらにはあれど、ひとつにあつめては千本にもなりぬべし。道のゆくてにはよき見ものなり。

かくおほきゆくてのさくらしらでなどみたけとのみはおもひたちけむ

この小川村なる何がしといふ寺のほとりなる道のちまたよりはしをわたりて、川にそひて十町あまりもゆけば、ちひさき宮ありて、いとおもしろくさきたる一木のさくらあり。すぎこしかたの花どもには一きはまさりて見ゆれば、そのもとにたちやすらひ居たるほど、さと人にやあらん、あたりなる畑うちたる人のあるに、「下多気までは道のほど、いかばかりにか」とゝへば、その人のいふには「この道は下多気にかよふ道にあらず、矢下といふ所にゆくなるを、しらでふみたがへ給ひたるなめり」といふに、「下多気にはいづこよりものするぞ」とゝへば、「かの小川なる寺のほとりなる道のちまたより、ひだりの

かたにゆくがその道なるものを」といふに、「あなくちをし」と人々もつぶやけど、せんかたなければ又もとの道にかへりゆくも、いとわづらはし。されど「この道をたがへずは、かの一木のさくらは見まじきを、なか〳〵幸なり」といふ人のあるは、まけじだましひよとをかし。はじめてきたる道には、かゝるふみたがへいとおほくあることなれば、ゆきあひたる人々にはかならずとふべきことになん。かくてかの寺のほとりなる道より左のかたにいりて、又山をこえて、やう〳〵下多気村にいたる。こゝもおなじ谷あひにはあれど、さすがにむかし国の司の君のましましゝ所の跡なれば、ひろくうちはれたり。こゝまで小川よりたゞには一里なりとぞ。この下多気の入口に川あり。その川のはしをわたりてすこしゆけば、産神の御社おはします。この下多気より七八丁ゆけば上多気村の入口にて、こゝに真善院といふ寺ありて、道のかたはらに鳥居あり。こを里人は「国司さま」、あるは「国司八幡」とまうして、則八幡の御社おはします。御社は南むきにたゝせ給へるが、杉の木立ものさびていとかうぐ〳〵し。そも〳〵この宮を八幡宮とは申せど、まことは広幡の大神にあらで、北畠具教大納言の御霊をまつりたる御社にて、むかし国司の御館のありし跡なり。御前に池のあるは、そのかみの庭のなごりにて、汀にたて石いとおほく、蛙石・琴石などいふ名ある石もありて、すべての石のさまも、よの常ならず。今の世に林泉・築山などいふものゝごとく、こちたくさとびたるかたにはあらで、優にみやびたるさま也。又この御社より四五町ばかり西のかたなる、霧が峰といふたかき山には、むかしの城跡ありて、今もその跡さだかに見えたり。又南のかたなる山にもおなじさましたる城跡ありて、むかしのさま今もめに見るやうなるは、いとなつかしきこゝちす。国司とまうしたてまつりて、いみじき御いきほひにさかえ給ひしむかしの御代は、かの西のかたなる霧が峰のあたりまで御館のうちなりけむを、うつりかはるよのありさまとはいひながら、かくせばきところとなりもてゆきて、やう〳〵池ばかりむかしのまゝにのこりたるは、いとものあはれなり。その昔はいかにめでたきつくり庭なりけむ。おのが遠つ祖もこの君につかへ奉りしことなど、

いひいでてしのぶゆかりのある身には池水ふかく袖ぬらしつゝ

君まさであせぬる池のこゝろさへうらさびしげに見えわたりつゝ

この池のみぎはに桜の一木二木さきたるを、

あれしその心もしらず咲いでゝさくらばかりは今さかりなり

池水のみぎはの花もうつりこしむかしの春を猶しのぶらん

とおもひやられて、これもあはれにおぼゆ。この八幡宮は、今はこの所の産神のごとくなりたまひて、二月十五日・八月十三日と年に二度、御祭もありとかや。さきにいへるごとく、さと人は「国司さま」とまうして、かく御祭などをもつかへ、いみじくうやまひたてまつるも、さすがにむかしの御いきほひ今のよまでのこりたるものならむとたふとし。この寺にこの多気の古き絵図あるよしかねてきゝしかば、いひいれて見まほしけれど、あるじの僧なきほどなれば、えもいひいれず。この御社の鳥居のまへより、川にそひて五丁ばかりもゆきて、はしのほとりにいづれば、すなはち上多気の駅にて、この所街道なり。もとよりこの街道は、俗に赤羽根越といひて、大和の国榛原の駅より大御神の宮にたゞにまうづる道なれば、これまでの山道にはやうかはりて、いとひろくにぎはゝし。そのうへ、このころ阿波国・紀伊の国などに御影(オカゲ)参てふことはじまりたりとて、その国人どもの菅笠と杓とをいづれもたづさへて、かずかぎりもなくゆきかよふは、ことにゝぎはゝし。かくてこの駅の篠や何がしといふものゝ家にいりて、ものなどくふ。

この駅より、かねてけはしきよし音にきゝたる飼坂といふ坂にのぼるなるを、人々の足も、こしかたの坂路につからしたれば、駕籠または馬にのらんとす。されど馬はかの坂路あやふかるべければ、われはかごのかたにのらんとするを、外の若人は、「馬もめづらし。かゝるをりならでは」などいひつゝ、俗にいふ「三方かうし」といふにあつらへて、かの坂路にかゝるに、げにもけはしき坂路なり。されば馬のうへにのりたる人たちは、よそめもあやふく見えたるを、わか人たちはさもおもはぬにやあらん、馬の口とるをのこにそゝのかされて、もろごゑに「やあとこせ。よいやな」とかやいふ、をりにふれたる歌を、いと声たかにうたひつゝ、さゞめきのぼるを見るも、かつは興あり。さて十町あまりものぼりつくしたるところに茶屋ありて、その所則たむけにて、桜峠といへり。その所より坂路をくだるに、むかひのかたにすがたことなる高山の見ゆるを、「いかなる山ぞ」と、かごかけるをのこにとへば、「三国が嶽といふ山にて、すなはち伊勢・伊賀・大和の三国にまたがりたる山にて、かの御嶽といふも、この山のふもとなり」とこたふれば、はやみたけにちかづきたるもうれしくなん。すべてこの坂路には、ちかきころうゑたりとて、さくらおほく、ところどころさかりなり。その道のほとりにうやく〳〵しく榜示をたてゝ、「千本のさくら、をり給ふべからず」とかきたるも、いとさとびたるかきざまにはあれど、心しらひはあさからず見ゆ。坂路をはなれて、上多気より一里といふに、奥津駅なり。この駅より川上若宮八満（ママ）の御社といふにまうづる道ありて、こゝより一里あまりありとぞ。この御社も、ちかきころまうづる人おほくなりて、わがすむかたよりもまうづる人あり。この奥津をすぎて市場村といふにいたる。この市場村に大きなる八幡宮のおはしますは、北畠家の代々の産神なりきといへり。その市場村をすぎて、奥津より一里といふに石名原駅にいたる。この駅より御嶽にはほどちかしといへば、皆人もわれも駕籠・馬よりおりて、かちよりゆくに、かのみたけのちかくなりぬるうれしさに足もすゝみて、ほどなく宿をはなれ七八町もゆきて、午田（ゴデン）といふ所にいたる。その所の道の右のかたはらなる山のうへより、みたけの花をのぞみゝるさまいとよしと、かねて聞しかば、その山に半町ばかりものぼれば、やがて峰にて、その峰より見わたしたるに、かのみたけはたゞむかひにて、ふもとより峰までたゞ一すぢに、数かぎりもなきさくらの今をさかりと咲ならびたるが、ひとめに見わたされたる、まづめをおどろかせり。うしろにはかの名だゝる三国が嶽たかくそびえて、いとたゞならぬながめなり。さるを午田てふこちたき名をしも、いかなるをこ人がつけたりけむ。今すこしみやびたる名にこそあらまほしけれ。

ながめやるみたけのさくらわけぬまもこゝろは花の中にいりにきされば、はやくものぼらまほしくおぼゆれば、この午田山をもとの道にくだりていさゝかゆきて、道の右のかたなる谷川の橋をわたりて、畑の中なる坂を一町ばかりゆけば、やがて御嶽の山口なり。この坂路はおもひしよりせばきに、右にも左にも桜のかぎりをうゑたれば、まことに花の中ゆくといふは、かゝる山路のことなりともいひつべきところのさまなりけりと、心とゞめて見もてゆくに、おほかたはさかりなりと見えたり。中にはまだしくて、いまだ冬木のまゝに見ゆるもあり。又ちりすぎたるもありて、雪のふりたらんやうにつもりたるそのうへをふみつゝ、のぼりゆくもいとおかし。やう〳〵ふかくのぼりゆくにしたがひて、いとも〳〵大きなるみ木は三かゝへ四かゝへもありぬべく、高さは五六丈ばかりもあるべく見ゆる。世には見なれぬ大きなる花の木どもおほくありて、げにたぐひなき花の所也。凡十町あま

りのほどはおなじさまなる並木なれば、おほしとも、かぎりなしとも、めざましとも、めでたしともいはむはなか〳〵おろかにて、皆人もわれも、たゞめをおどろかしたるばかりにて、いかゞとも言葉にはいひがたく、こゝろはゑひたるがごとし。かくてのぼりはてたる所に石の鳥居ありて、その鳥居の左のかたはらに、橘千蔭が「かりにだに手ぶさなふれそみたけなる神のめですこれのさくら木」といふ歌を、万葉仮字にてかきたるをゑりたる碑あり。その鳥居より石のはしを一町ばかりものぼれば門あり。その門を入て七八間おくに蔵王権現といふ神の御社たゝせ給へり。こはよし野にもおはする神にて、この山のさくらもこの神木なりといひて、かりにもをることをゆるさずといへり。又ねがひをかけたるかへりまうしにうゝるもありとなん。この蔵王権現とまうす神はいかなる御神にましますかはしらねど、かくさくらをめでましてまもり給へるは、いひしらずみやびたる、たふときみこゝろなりや。この御社のかたはらに、やがて寺あるに、別当の僧すみて真福院といへり。宗旨は真言宗なりとぞ。この寺の庭、うちはれたる所なれど、まへなる木立にさへられて、桜はおもふばかりも見えずなむ。しばしいこひて、又ももとの坂路をくだるほども、又めづらしくあかぬこゝちす。こたびはいかばかり花の木あるやかぞへ見むとて、ふもとまであらましかぞへたるに、よの常の大きさばかりなる木ども六百七八十本あまりもありて、その中によにまれなる三かゝへ四かゝへもあるべき大木五十本あまりあり。その外にちかきころうゑたりと見ゆる若木はかぞへもおよばず、かずかぎりもなし。又むかしの春のさかりゆかしくて、大木の老くちて実木ばかりになりたるも見えたり。その中にも、かの三かゝへ四かゝへばかりもありといふ大木のかぎりは、よの常には見もおよばぬ、いとめづらしき木立にて、かゝる大木はよし野、又はあらし山などにも見ざりきかし。もとより老木のことなれば、花のさまもいとうつくしく、又さきたる花の数もいとおほく、まことにいひしらぬ木立なれば、これぞよにたぐひなく、めでたき見ものなる。されば「午田より見わたしたるさまよりは、この老木どもの本にてまぢかく見たるさまこそ、あはれおもしろき見ものなれ。この老木のごときさくらの、せめては一本にても、わがすむさとなどにあらましかば、いかゞめでたからん」など人々といひあへり。されどこの山の花をよし野にくらべては、かずすくなしといふべく、あらし山にくらべては、けしきおとりたりといふべかめれど、この五十本あまりの大木は、よしの・あらし山にもたぐひなければ、これぱかりぞ、この山のよしの・嵐山にもまさりたる所なる。もとよりこのところの花は、さきにもいへるごとく、わがすむあたりの花のちりすぎたるほどよりものすればよきほどぞと、かねてきゝおきしかば、その心づもりにていで来たるに、こゝろのうらもまさしく、かく満開（サカリ）の時にあひぬるこそ、としごろの本意かなひて、いとうれしけれ。おとつひの雨風はいかゞあらんと、あんじわづらひしに、かたへよりは「この雨風にては花もこゝろもとなし。かならずちりぬらん。さればこん年の春に又おもひたつかたよかんなり」と家人などはいひしかど、かくまでおもひたちぬるをいたづらにせむもくちをし、よしやちりぬる跡なりとも、所のさまをだにせめてはみばやとて、おもひおこしたるを、その雨風は露ばかりもさはりたるさまも見えず、なか〳〵に、かの雨にもよほされて咲いでたりとおもはるゝ梢どもゝ見ゆれば、花のためには、かの雨も心をやしたりけむなどおもはる。さてのぼりくだりするほどに、よみいでたる歌ども。

いく春かよそにみたけのさくら花ことしうれしくわけのぼるかな

いく春かけし心もへだてきてことしみたけの花のしら雲
こひわびし心もはれて春毎のねがひみたけの花のしらくも
みたけ山かねておもひしほどよりはたちこそまされ花のしら雲
たれゆゑにおもひはたゝぬ旅衣きたるを花もあはれとはみよ
花見にとわれはきつるをみたけ山たゞしら雲の中にこそあれ
たぐひなきみたけのさくら見ぬ人やよし野を花の山といひけむ
たぐひなきみたけの花を見たる人まれなることのなげかるゝかな
見にくるを花はうとまじみたけ山わくるひとめのあまたなければ
きてみよと人にすゝめむなみならずおれるみたけの花のにしきを
ゆく道のせまきもうれしみたけ山並木のさくら見るにちかくて
わけのぼる蜜嶽のさくら心さへはなより花にうつる山道
目には雲足には雪をわけこえてのぼるみたけの桜狩かな
雪とちり雲とさけるもとり〴〵にあかぬみたけの山さくら花
見にきても色香もしらぬみたけにて花のおもはむこともはづかし
色も香もしらぬよひとは来もせぬを花やうれしとみたけなるらむ
言の葉の花はなか〳〵さきもせずみたけのさくらいろにけだれて
ひきつれて御嶽のさくらわけのぼるけふや言葉の花の友どち
をることはかたきみたけの山ざくら言葉のはなを家づとにせん
人のこぬみたけのさくらみたりとてほとりやせまし宿にかへらば
をることをゆるさでかたくまもります神のこゝろのたのもしきかな
いかにせん見てのみやはとおもへどもをることかたき山のさくら
を
枝のみか御たけの花はおよびをりてかぞへもかねつ千本八千本
枝さしもよのつねならでいやたかくみたけのはなはあふがざらめ
や
年ふかく木たるがうへにいとゞしくおもる蜜嶽の花のしらゆき
中々にながめはよそにまさりけりさかりおくるゝ山のさくらも
雲にとぶ薬はまねどいやたかくのぼれば我も花の仙人
はる〴〵とみたけにこしもさく花のながめむさぼるねがひとをし
れ
うらやましうへなき花のおほきみ（蔵王）をさめてもたる神ときくにも
さくら花さかりにあふも寺の名のまこと（真福）のさちといふべかりけり
かくよみたれど、猶あかぬこゝちのせらるゝまゝに、をこがましくも長歌をさへひねりいでたる。

よきひとの　よしとは見ねど　みよし野の　よしのゝ山に
名も似たる　御嶽の山に　咲をゝる　さくらの花を
鳴神の　音のみきゝて　ふく風の　めにはいまだみず
手まねく　こひてしまにま　この春は　わけむものとて
わか草の　あゆひたづくり　手束杖　こしにたがねて
玉鉾の　道の長手を　はる〴〵に　いゆきさぐゝみ
その山に　のぼりて見れば　大雪の　ふりかつもれる
白雲が　おほひかくすと　心はも　おびゆるまでに
花くはし　花咲をゝり　木立はも　たかくぞたてる
枝はしも　ひろくさしつゝ　いひもえず　たへにしあれば
よき人の　よしと見ずとも　いざやわれ　よしとよく見て
木立なす　いやよにたかく　その枝の　いやよにひろく
かたりつぎ　いひつぎゆかむ　つるぎたち　みたけの山の
花のさかりを
今ひとつちかきよぶりのも、

みよしのゝ　よしのゝ山に　名もかよふ　みたけのさくら
これも又　たぐひなき名の　よにたかく　聞ゆるまゝに
わけ見むと　山わけ衣　こゝろには　おもひかけても
いく春か　よそにへだても　いたづらに　年も月日も
たつかゆみ　心つよくも　この春は　心ふりおこし
おもひたつ　やよひの空の　朝がすみ　かゝる空にも
さきだちて　暁ふかく　おもふどち　袖ひきつらね
たちいづる　ゆくての山も　花の雲　かゝるながめに
その山や　ましていかにと　いそがるゝ　足もすゝみて
ほどもなく　わたるみたけの　山ざくら　千本やちもと
さく陰に　とゞむる杖も　つく〴〵と　見るにこゝろは
ゆきとちる　花のしたみち　ふみこゆる　跡のをしさも
おもほえず　心も空に　わけのぼりつゝ

かくてふもとにくだりはてたるほどは日もくれかゝりぬれば、いで石名原の駅に宿をもとめんとて、その宿にいそぎかへりて、中子何がしといふものゝ家よしと、かねてきゝしかば、とぶらふに、かの御影参にとてきたる参宮人（タビヾト）いとおほくて、家のうち、もれぬかたなくふさがりたれば、こよひの宿を、えかさゞるよしいふに、「おそのみやびを」とはおもへどせんかたなくて、この宿なる酒や何がし・ますやなにがしなどいふものゝ家をもたづねたれど、いづれもおなじさまにて、いとすげなくも宿をかさゞれば、ほと〳〵なやみて村役人てふものゝ家がりたづねて、せちにたのみつゝ、かの中子なにがしの家にいひいれさせたるに、やう〳〵宿をゆるしたれど、いとせばき一間をかしたるばかりなれば、五人に二人の供人さへそひたる七人の宿るには、いともせまくたよりあしけれど、さりとていかゞはせん、かゝるわびしきことも、かの花ゆゑにこそありけれとおもひなぐさめて、さのみはかこたず。かくて家あるじのいで来たれば、「このみたけの花をよそよりも見にくる人ありや」とゝへば、「かゝる田舎のことなれば、花見にくる人はいとも〳〵まれまれ（ヽヽ）にて、所の人々はめづらしともせず。さればこの山の花は、はじめよりをはるまで、花の円ゐなどする人はいとすくなし」といへり。さればこそ、けふの山路にても、花見とおぼしき人には四人五人あひしばかりなれと、おもひあはされぬ。まことや、かゝるめでたき花を、かく見る人のすくなきは、あかずくちをしきやうなれど、見るためにはうるさきことなく、心しづかにしていとたよりよく、かつは花をかごとに、その花はよそにして、酒のみ、ものくふことをむねとしつゝ、たはぶれくるふおこ人のなきは、中々に花のためにはきよらかにてよかるべくや。さればわがごとき、よにねぢけたるひがものゝためには、よにたぐひなきところなりけりと、かへすがへすもめでたくおぼゆるは、このみたけの花なりかし。されば、みやびやかにまことの花見をせまほしくおもふ人あらば、かならずおもひたつべき所にこそ。

二日。朝とくおきいづるに、天気いとよし。きのふのなごりたゞならずおぼえしかば、又もかの山の花見むとていでたつ。道のゆくてなれば、まづ午田山にのぼりて見わたしたるに、朝日の光さしそひて、そこはかとなくかすみわたれる花のけしき、一きはおもしろし。

ながめやるみたけの花の朝霞まだたちならぶけしきやはある

かくても猶あきたらねば、又もきのふの橋をわたりて坂路をのぼるほども、朝日の光さしそひて、色ことに見えたる花の木どもは、きのふの夕ばえのさまもものゝかずならずおもはるゝのみかは、一夜のうちに咲まさりたる木末なども見えて、いとおもしろし。

狩衣きのふもけふものぼりきてなるゝみたけの花もえならず
きのふより咲そふ枝におもかげもかはるみたけの花の山道

花の枝にて鶯のなきたるを、

うぐひすもひとく〳〵の声たてゝみたけのさくらまもりがほなる
さらずとてたれかはたをる鶯のひとくといこふ声もあやなし

花になく歌のしらべは鶯もみたけのさくら見にやきつらん

のぼるともおぼえず、すゞろにかの寺の所までのぼりつくして、それより又もくだりくる坂路のなごり、いとたゞならずおぼえければ、

色くれむ花ときのふは見すてにきいかゞはすべきけふの山道

咲まさる枝のみならでなごりさへけふはたちそふ花のしら雲

かへるともこゝろのこして花の雲かゝるあたりはたちもはなれじ

かへるをもなにかをしまむ今よりはみたけのはなをおもかげにして

花の雪ひかずもつまで立かへるこゝろはきゆるけふの山みち

もとの石名原の駅にかへりて、こたびは道をかへて竹原といふ村のかたにいでゝ家にかへらんとす。そはきのふにおなじ道をかへらんもおもしろからず、かつは坂路にほと〳〵ゆきこうじたるがうへ、こなたの道には川口の関の古跡などあなれば、その所のさまをも見んとて也。さればこの石名原の駅の中なる石橋のほとりより左にをれて、細道に入て四五町ゆけば、かたへにおもしろき岩山ありて、神の御社もおはします。老鹿村といふをすぎて八知村といふにいたる。

数しげきさくらわけみしゆかりとて八千てふ村をけふかよふかな

この八知村をすぐれば、かたへに川ありて、きのふの多気川のおちあふ所あり。この川の末はすなはち大仰川なりとぞ。おなじやうなる細道をゆき〳〵て、坂をひとつこゆれば竹原村なり。こゝは所のさまもせまからず、いとうちはれたり。こゝまで石名原より二里なり。この竹原村は家ゐもいとおほく、大きなる白山神社など申も村の中におはします。この村をはなれて橋をわたり、川のつゝみをのぼりゆくほど、いとけしきよし。このあたりにては、川もやう〳〵ひろくなりもてゆきて、むかひにはすがたことなる岩山ありて、松のたゝずまひもおもしろく、川にはいかだをうけならべたるさまなど、都のあらし山・大井川のおもかげあり。

みよし野に似たるみたけのそれならであらしの山にかよふこの山

この川のつゝみをのぼりゆくほど、道ちかゝらねど、川中にかずかぎりもなき岩どもありて、その岩にふれてはくだくる川波のけしきなど、えもいはずおもしろきさまにこゝろうつりて、さのみはとほくもおぼえず。この川づらをはなれて南家城村といふにいたりて、この村の中に常夜灯のあるちまたより右にをれて、北家城村といふ村のかたにゆかんとす。さてこの常夜灯に、「太一」といふ文字ゑりつけたれば、いといぶかしくて、「こは何の為なる灯籠にか」とさと人にとへば、「大神宮にたてまつる灯なるを、このあたりにてはすべてかくゑりつくるならはし也」といへり。「その心はいかに」とゝへば、「しらず」とこたふ。こはいかなることならん、かへすぐ〳〵もいとゝいぶかし。その北家城村より又も川づらにいでゝ四五丁ゆけば、ふたつのきしに、いともいかめしき岩村のさしいでて、川巾もいとせまくなりたる所有て、水のふかきこと、いかばかりともはかりしられず、いとものすごきところのさま也。則この所は、せとが淵といふ所なり。その岩村のけしき、あたりの山の木立のさまも、いとよしある所のさまにて、

川波のなみにあらねばこゝをせとたちよりて見むきしの岩むら

渕ふかきながめにわれもあくがれてうごくはかたききしの岩村

この渕をすぎていさゝかゆけば、川の中に千方岩といふ、多きなる石あり。又かたへの山よりおつる清水を、太刀洗の水といへり。こはそのむかし、藤原の千方といふ人この所にすみて、きたなき心をいだきたるを、官軍のせめほろぼしたる古き跡にて、その岩はその千方をころしたるところ、その清水はそのをり太刀をあらひし跡なりといひつたへたれど、ものにも見えず、いといぶかしければ、つら〳〵おもふに、この所は川口のほとりなれば、むかし藤原廣嗣が反せし時、この川口に行宮をつくらして、行幸ありしおもむき見えて、その時大伴家持ぬしの「川口の野辺にやどりてよのふればいもかたもとしおもほゆるかも」とよまれたることなどあれば、もしはその廣嗣のことを、千方とつたへあやまりたるにはあらじか。されど、こはこゝろみにいへるのみ、それとはかならずしもさだめがたかるべし。この川づらよりほどなく川口のさとに入る。こゝまで竹原より二里ばかりもあり。かの音に聞えたる関の跡といふは、村の中より右のかたに入る細道ありて、そをむかしの街道なりといひつたへたりとて、そのかたはらなる小だかき所に、木ぶかき所のあるを、則関屋の跡なりといへり。その所のさま、むかしの関のありけむおもかげ見るやうなる所のさまにて、後のよに、好事（コトコノム）世の人のつくりたる古跡とも見えず。

あらがきも今は跡だにながれきて名のみとゞまる川口の関

この川口村に久世安庭がゆかりの人あれば、そをとぶらひてものなどくふ。そはこの道もきのふのごとく旅人のかよはぬ道にて、茶屋などいふものはなき道なれば、この家をたのみてかくこひたるになん。かくてものなどくひ居たるほどに雨ふりいづ。今までの雲のふるまひもさは見えざりしかば、時ならぬしぐれにて、しばしのほどにははれぬべくおもひつゝ待居たるに、ます〳〵雲ふかくなりもてゆきて、やむべくもあらねば、かねてとものをのこにもたせ来たる雨衣とうでゝ、うちきるもいとわびしきものから、かつはめづらしくもおぼゆ。このさとをはなれて柚生村といふをすぎ、川のつゝみにいづるほどは、ますます〳〵ふりいでたれば、かの雨衣の袖もとほるばかりにて、

わびしきもきのふならばとなぐさめてかこちははてぬけふの春雨

このつゝみの道をゆき〳〵て街道にいづ。こは俗にいふ阿保越の街道にて、かの御影参てふ旅人、この道にもいとおほし。かくて大仰の駅にいたりて、ものくはする家に入て蕎麦切てふものをくひ居たるほど、八太のかたにかへる駕籠ありて、すゝめしかば、さきの雨に雨衣の袖もとほりて、いともわびしくおぼゆるをりなれば、そはよかんなりとてのりぬ。谷戸・井関などいふ村々をすぎて八太の駅にいたる。この所まで大仰より一里なり。かくてこのうまやにて日もくれかゝりぬれば、猶おなじかごにのりてこの駅をすぐるほど、風さへいみじく吹いでたれば、かごにたれたる雨衣もそのかひなく、旅衣の袖もはしたなくぬるゝまで雨ふきいれていとわびしきに、あやめもわかぬ闇にしあれば、いづこいかなる村々をかすぎたりけん、それもおぼえずして、亥の刻すぐるころほひ、からうじて家にはかへりぬ。わづか二日のうちにとしごろの本意かなひて、かくものしつるはいとうれしきまゝに、ありつることどもをかきとゞめたるは、いとつたなき筆のすさびにて、

色香なき言葉の花もみたけ山わけ見む人の枝折とはなれ

とて、つゝましさもうちわすれて、人にも見することゝはなりぬ。

小津久足

本居有郷「三多気の日記」

密嶽日記

いまやうのうたふうたにも「花はみよし野」なゝどうたひて、をさな子までも、よし野の花のよきことはしりたるに、伊勢国一志郡なる密たけといふは、さばかりはきこえねども、「桜の古木あまたありて、かゝる大木はよしのにもなし」と人のいへるにつきて、としごろ見に物せまほしくはおもひわたりつれど、花のころはあやにくに、さはることなどのありて得ものせずてすぎきぬるに、ことしはいかなるよきとしにかあらむ、したしき友どちかたらひあはせて物せんとおもひたちて、七八とせ前つかた物せし人にとひけるに、「かのわたりはいと寒き所にて、こゝの花ちりて四五日過るころ待しに盛なるもありつれど、まだ冬木のまゝなるもありき」ときゝて、「三月晦日の日ゆかむ」とて友どちいひかはしおきけるに、雨風はげしく吹て、其日はむなしくおもひとゞまりぬ。未刻過るころより雨もやみ、西風はげしく吹て、やう〳〵空も雲まばらに晴けり。ことしは閏三月ありけるとしにて、のちの朔日おもひたちぬ。かのみたけは十里あまりも有て、「二夜のたびねならでは」と人々いひけれど、友どち「さばかりの道にもあらじ、一夜にていかでかへらむ」といひけるまゝに、とくよりおき出て、また寅刻にはならぬほどにいでたちぬ。空いとよくはれ、西風吹ていとさむし。先、曲村・深長村なゝど過ゆくに、まだ夜は深けれど、はや鳥のなく声などして、いとこゝちよし。伊勢寺村など過るころ、ほの〴〵夜はしらみたり。横瀧を右に見て堀坂山をのぼるに、右のかたに堀坂ノ神社おはします。はるかにふしをがみてすぐに、いと大なる桜の今を盛とさきたるを見て、みたけの花今さかりなるしをりにやとおもひて、

ゆくさきの盛しられてはやみたくほり坂山のやまさくら花

などいひいでゝこゝろいさみぬ。山川にそひつゝ坂路をのぼる程、いとけしきよし。所々にすみれ・山吹・つゝじ・桜なども盛に咲けり。やう〳〵峠にのぼりて見かへれば、伊勢のうみ、家住あたりの家居など見わたされていとけしきよし。

またふかくいそぎていでし春のよもほの〴〵あくる堀坂の山

此所よりくだる坂路いとさむし。程なく与原といふ里にいたる。松坂よりは三里といへり。しばらくやすみて、夫より山の添をゆき〳〵て、後山なゝどいふ里をすぎて柚ノ原村にいたる。兼て此道は物食所もなきよしきゝをりつれば、食物などもち来りて、この村にてくひなどす。与原よりは壱里ばかりもあらむ。此ちかき山にところ〴〵桜さきたり。ながめつゝゆくに、小川村にいたる。中程に寺あり。「其所より右へゆけば下多気なり」と供のをのこのいひけるまゝに、ながれにそひてゆく。此ところ河の石なゝど多くありて、いときよらかなり。十丁ばかりもゆきて、少し小高き所に社有。そのもとにいと大きなる桜さかりなるありていとよし。しばし石にこしうちかけなゝどして見ゐたり。さて少しゆきて田つくるをのこにとふに、「下多気へゆくには道たがへり。寺より左にゆく方、下多気なり」といひければ、人々口々につぶやきつゝ、すぎこし寺のかたまでかへりぬ。されど「かゝる道たがひなかりせば、このさかりなる桜はえみじ」なゝどいひて、

しるべしてふみまよはずは山ざくらかゝる盛の花は見ましや

なゝど口づさみて、河にそひて山路をしばしゆくに、左のかたに鳥居あり。とふに、「蘭神社なり」といふ。こはわが里よりもまうでゝ、疫病をのがるとかいひて、杉の枝を人々をりてかへるところなれば、

物せまほしくて道のほどをきくに、「壱丁あまりあり」といへば、まうでぬ。前に河あり。橋をわたりて石階を少しのぼるに、宮居・杉の木だちなど物ふりて見ゆ。此神はいかなる神にか。またもとの道にかへりて、山ふところをしばらくゆけば、下村にいたる。河ありて板はしをわたる。ほどなく下多気なり。さて、かねてよりきゝゐたりし、おのが遠祖のつかへまつりし北畠の君住たまひし御跡のなつかしくおもひて、とひきくに、「下多気・上多気とのあひだに小き杜あり。これその御跡なり」といへり。又「霧峯とかいひて、御城のありしあとも、其つゞきの山なり」といへり。すべてこのあたりにては、皆人「国司様」とぞいひける。ゆく道三丁ばかりもありて、右のかたに杜あり。少しこだかき所に鳥居有て、まうづるに、「八幡宮」といふ額あり。これぞ具教大納言の御たまをいはひまつれる御社なりとぞ。この御前に、そのかみの御庭の池ありて、いろ〳〵ふるき石などあり。この石にいろ〳〵の名ありときけど、しられず。また宮のかたはらに真善院とて、ちひさき寺あり。「これに、むかしの事ども書とゞめたる書あり」ときゝて見まほしけれど、今は無住ときゝて、いとほいなくなむおもひける。さて御庭の池のきしに、さくらさきたるを見て、

君ましゝ昔の跡ぞしのばるゝふりにし庭の花を見るにも

此かたはらなる山は、霧峯といへる山にはありける。三四丁ゆけば上多気なり。小川村より壱里あまりありとなむ。この所は、萩原より飼坂・櫃坂などこえて伊勢の大御神へまうづる大道なり。このころは御蔭とかいひて阿波・紀州などより多く人まうで来たりて、其国の名書つけたる菅笠をきて杓なゝどもちて、おびたゞしくわれも〳〵とまうでぬ。こしかたに引かへていとにぎはしく、こゝろもいさみぬ。二三丁ゆきて、さゝやといふ処にて物食なゝどしつゝ、「みたけまではいかばかりの道にか」ととふに、「三里半あり」といへり。「これより飼坂といふ、いとけはしき坂路あり」といひければ、友どちおもひ〳〵にて駕籠・馬などにのりてゆく。坂路にかゝるに、げにいとけはしき坂なり。半道ばかりゆくほど峠にて茶屋あり。少しくだりたる所より、むかひはるかにみたけの山見えて、「麓に白雲のかゝりたるやうに見ゆるは、これみたけの花になん」といひければ、

遠かたに棚引くもとみたけ山ふもとにかゝる花のしら雲

いと〳〵心もいさみつゝ、ほどなく坂路もすぎて、奥津などいふ駅にいたる。左のかたに石ふみありて「川上八幡みち」とあり。供なるをのこにとふに、「こゝより壱里あり」といへば、こたびはゆくさきのいそがれければ、まうでずしてやみぬ。ほどなく石名原といふ駅にいたる。多気よりは三里あまりありとぞ。「これよりみたけまでは、はや十八丁」といへば、彼所より、あないの人をたのみてゆくに、午田とかいひて、道の左のかたに山あり。半丁ばかりのぼりて見るに、むかひに密嶽の桜ふもとより見わたされて、今なんさかりと見えて、いとけしきよし。

ほどちかく見えて御岳のふもとより咲つゝきたる花の白たへ

かの山は、大和・伊賀・伊勢の三国にまたがりたれば、三国嶽ともいふとなん。はや木本にゆかまほしくて本の道にかへり、右のかたに板はしあり。わたりて二三丁ゆきて山路にかゝる。此ところより左右並木なり。見わたしつゝゆくに、今盛なるもあり、又冬木のまゝなるもあり、さかり過たるもあれど、なべて盛にて、白雲をわけゆくここちす。なかにも三四かひもありける花は、四丈五丈もたかくのびて、四方に枝さしかはしたり。すべていづれの花も、うるはしきはなり。この並木十丁ありといへるに、空うちながめつゝ心も空にて、ほどな

く門前にいたる。石だんをのぼりて蔵王権現を拝して、もとの門前にかへる。右のかたに坊あり、真福院となんいふ。かねて此所にて一夜のやどりをこひて、朝日にいろそへむ桜のけしき見まほしくおもひけるに、前なる庭は、はれたる所なれど、一と木にかくれて花は見えざりければ、石名原の駅にやどらむと、もとこし並木をかへるに、桜の数はいか計あらんと、あらましかぞへけるに、七百本ばかりもありて、大木は五十本計もあり。又四五尺あまり有も、かぞへたらむには数かぎりあるまじく覚ゆ。すべて此桜は、神のめでますさくらなれば、手折なゝどすればたゝりありとなん。かの並木のところはなるゝころ、はや日もくれにおよびければ、

山さくらあかずみたけをよそにしてかへるさをしき花の夕ばえ

なゝどいひつゝ、かの石名原にかへりて、中子何がしの所にやどらむとするに、この頃の御蔭まゐりにて、いづこも〳〵ふさがりたるを、からうじてやどりたれば、いとせまきひとまにやどりぬ。何くれと、けふの道すがらのことなゝどかたりつゝ、ふしぬ。

二日。いと天気よければ、かのみたけの花の朝のけしき見まほしくて、いそぎゆくに、きのふ見しにまさりて、あさひのうつろふけしき、いはむかたなし。並木の外のかたは、はた、又薮などあり。そのかたにゆきて見るに、ひとめに見わたされて、えもいはれぬは、処々にて出てぞ見ける。きのふこし門前までゆきて、花をながめつゝ、

けふも又おもふともどちたどりきてあかずみたけの花のこのもと

まもります光そひてや色ごとにみたけの山のやまさくら花

まもりてや花の色香もたぐひなくみたけの山の神の桜木

なゝどいひて、もとのやどりにかへりて物なゝどくひて出たつ。けふは川口関の跡をも見むとて、八知谷といふ方におもむく。かの石名原をはなるゝ所に、はしありて、そのまへにほそき道あり。左にをれて五六丁ゆけば、山のふところに村あり。名はわすれぬ。そこを過て又山のふところをゆくに、こゝかしこ、わらびもえ出たり。

こゝかしこもゆるわらびををり〳〵にをりてゆくての道の手づさび

所々にて、かくをりつゝゆくに、ほどなく八知村といふ所にいたる。此あたりの川は、きのふこし小川なゝどいふあたりの河とおなじやうにて、石なゝどありていときよし。この川は大仰・雲出なゝどの河上なりとぞ。川の流にそひてゆくに、処々橋ありて、いくたびとなく此河をこなたかなたの峯にぞわたる。さて竹原の里をすぎて川添をゆくに、かじかといへるもの、ところ〴〵になきたり。ゆき〳〵て南植木・北植木などすぎて、瀬戸渕とかいふところにいたる。大なる岩などおびたゞしくありて、築山といふものしたらむやうなり。渕は青々として、いとおそろし。岩のはざまより水おちなゝどして、瀧の如きところもあり、けしきいとよし。千かた岩などいふありて、里人のいろ〳〵いひつたへもきゝつれど、わすれたり。十丁あまりもゆきて川口の駅にいたる。かのきゝおよびし川口の関の跡は右のかたの山の上にて、ふるめかしく見ゆ。杜なども有て社ありとぞ。少しゆきて、こたびうちつれだちたる友の中なる久世安庭のしるべのかたにたちよりて休けるに、雨ふりいでければ、雨よそひしつゝゆく。石名原よりこま(ママ)で六里ありといへり。柚生里過て、はた道ゆくころ、雨いたくふりいでゝ、いとわびし。入相過るころ、大和街道の大仰といふ所にいづ。こゝは大道にて、にぎはし。しばしやすみて、いせきなゞど過るころ、日はくれはてぬ。はたにてやすみゆくほど、風はげしく吹て雨もそひ

たり。都・小川・権現野など過るころ、ます〳〵はげしく吹て、そこらの村々ありともおぼえで過ぬ。からうじて、みわたりの川にいでたり。亥時過たるさまにて、いとしづかなり。市場・久米すぎて、子刻すぐるころ家にはかへりぬ。けふの道は十一里ばかりなるを、午刻ころよりいでたちたれば、いともおほくの道にて、いたくつかれぬ。

としごとにおもひわたりて此はるはねがひみたけの山さくら花

本居有郷

〈付記〉

本稿を成すにあたり、慶應義塾大学図書館、本居宣長記念館、日本大学総合学術情報センターには、貴重な書籍の閲覧・翻刻許可を賜わった。また、本居宣長記念館の吉田悦之氏には、本居有郷周辺の人物について多くのご教授をいただいた。ここに記して、感謝の意を表します。

（ひしおか　けんじ・本学大学院博士後期課程）